

子育てを支える支援者の力量形成

大村, 綾
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/19620>

出版情報：飛梅論集. 10, pp.1-16, 2010-03-31. Graduate School of Human-Environment Studies,
Kyushu University
バージョン：
権利関係：

子育てを支える支援者の力量形成

大 村 綾*

1. はじめに

本稿の目的は、子育て支援者の実践事例の検討を通して、これまでの学習支援者の力量形成の捉え方を再検討することにある。

学習支援者の力量形成についての研究は、D・ショーンやP・クラントンなどの理論を援用する方法で、これまで多数おこなわれてきている。ここでは、支援者を対象に、研修や講座など、いわゆるプログラム化されたフォーマルな教育の場において、自身の実践を考察し、ふり返るという取り組みが中心になされてきた。しかしながら、支援者の力量形成は、フォーマルな教育の場だけで行われるものではなく、日常の実践というノンフォーマルな場においても営まれている。すなわち、学習者との実践的な関わりの中で気づき、学び、知識や技術を獲得し、成長していくという過程の中においても、支援者の力量形成がみられるのではないかと考えるのである。また、これまでの研究では、上述したような海外理論の援用による実践分析にとどまる傾向にある。ここでは、支援者の個人的な能力の向上が議論の中心を成しており、その能力が実践の中でどう活かされてくのか、更には、実践を取り巻く人々や地域社会にどう影響しうるのかについては検討される機会がほとんど持たれてこなかった。そこで本稿では、支援者の力量形成がその後、波及的にどのような効果をもちうるのかについても検討していく契機としたい。

以上の問題関心から、本稿では日常の実践場面において営まれる支援者の力量形成に着目し、その力量が個人的な力量形成にとどまらず、実践を取り巻く地域社会や住民の協同関係構築の一途を担うのではないかという仮説のもと、これまでの支援者の力量形成の捉え方について再検討していくことを目的とする。ここで従来の研究では着目されてこなかったノンフォーマルな学習の場における支援者の力量形成について分析していくことは、支援者の力量形成の議論において新たな視点を示すものになると考える。

支援者の力量形成の捉え方を検討する際、まず先行研究においてこれらがどのように捉えられてきたかを概観する必要がある。この作業を通し、本稿では本研究が従来の研究にどのように貢献しうるかを探る。そこで以下、第2節では、学習支援者の力量形成をめぐる議論の検討を通して、支援者の力量形成の捉えられ方について整理をする。そして、これらの作業を通して本研究の位置づけおよび課題を示す。第3節以降では、子育て支援というノンフォーマルな場における事例分析を

*九州大学大学院博士後期課程

通して、支援者の力量形成について検討する。第5節では、当該実践における支援者の力量形成の特徴とその意義について考察していく。最後に第6節では、まとめと残された課題について述べる。

2. 支援者の力量形成をめぐる議論

2-1 学習支援者の力量形成をめぐる議論

学習支援者の力量形成は、社会教育職員論の研究において一定の蓄積がなされている。

今日、社会教育学界内における学習支援者の力量形成の議論は、D・ショーンやP・クラントンなど米国系の成人教育研究者の枠組みの検討と、それをもとに職員の力量形成を問題としている研究が一つの潮流をなしている。そこでは「省察」や「ふり返り」を軸に据え、職員自らが自身の実践を客観視し、「記録」や「話す」ことを通して課題を捉え、実践を継続、発展させていくという方法がとられる傾向にある。例えば、D・ショーンの「省察的実践者」¹⁾としての支援者の専門性の着目では、実践に直接かかわる学習支援者が実践を記録し、実践の外側にいる人々を含めてその取り組みを検討し、分析し、次の実践に生かし、継続していくことが目指され、「実践をふり返る」ことと、学習支援者が学習を組織する力量の形成が密接に結びついていることについて検討されている。そして、実践に即した分析や検討の積み重ねを通して、社会教育関係職員に共通する本質的な役割として、「学習の組織化」が注目され、学習支援者の専門的な力量形成を可能にしていくための具体的な視点と方法が模索されるようになっていった。

このような経過を経て、今日、学習支援者の力量形成を目指す実践研究では、「ふり返り」を用いて検討される傾向にある。特に社会教育の実践的取り組みの中における学習支援者のふり返りに関する議論については、海外の理論を職員個人の実践にあてはめ、その認知的な側面について検討し、ふり返りの必要性を示す方法でおこなわれている。

例えば三輪 [1999: pp96-99]²⁾ は、実践のふり返りには「教えるよりも受容するのがよいと頭では思っている、実際には教えているばかりの自分に、問いなおしをしているつもりでも実際には詰問している自分に気がついて愕然とする」ような、厳しい「自己省察」を伴うことから、成人の学習における省察的なふり返りの必要性を提唱している。一方倉持 [2004: pp160-172]³⁾ は、「批判的なふり返り」に着目する。自己を批判的にふり返ること、すなわち自分が実際に実践で行っていることと、こうありたいと考えることが一致しない場合、それに気づき、その気づきに基づいて背後にある自分自身の前提を問い直すきっかけになるという。そこで前提にある歪みや偏りの代わりとなるパースペクティブを吟味することができれば、力量形成の場は実践をよりよく展開するために、自分自身に変化を生じさせるものとして位置づくると述べている。そして、「書くこと」や「他者とのやりとり」が批判的なふり返りの重要な要素として取り上げられている。

このように「自己省察」や「批判的なふり返り」という、様々な概念を通して支援者の力量形成が検討されてきた。特に倉持においては、今すぐに役立つ技術や知識の習得を、講義型で得る従来型の研修は、技術合理性に基づくものであり、複雑で価値が葛藤する状況を含む現実の学習支援の

実践ではうまくあてはまらないことを指摘している。そして、知識や技術を単に知るだけでなく、実践でレパートリーとして活用し、個別具体的な状況の問題に結び付けるために重要なのが、ふり返りであると述べている。このような問題意識から、実践的な力量形成におけるふり返りの意味を検討している。では、この実践的な力量形成におけるふり返りは、どのような場においてなされているのか。この点について、以下検討していく。

2-2 力量形成が営まれる場の検討

倉持は、実践的な力量形成におけるふり返りの意味を示すべく、D・ショーンの「批判的なふり返り」の概念を援用して、あるラウンドテーブルを事例に検討している。そこでは、ラウンドテーブルの参加者があらかじめ自身の活動実践を記録化して準備、持参し、ラウンドテーブルで実践報告をする。それを他の参加者が聴き、質問などが行われる、というものである。ここで倉持は、「実践報告のための実践記録の作成であるが、これが自分自身の実践について意識的にふり返る作業の第一歩になる」と指摘する。さらに、「書くことによる実践をふり返る作業を通して、自分自身の実践プロセスを確認するだけでなく、自分の実践における役割や実践の理論についての自己の批判的なふり返りを行っていると言える」と述べている。

また、力量形成の営みを、学習記録づくりという実践を通して検討した木全ら〔2004：pp147-159〕⁴⁾は、「学習記録をつくり、それを活用しふり返ることが、学習者理解や学習過程についての多くの発見や感動につながる」としている。そして、そこからさらに「学習者との人間形成づくりの能力や成人の相互学習を目指す方法技術に関する力量につながる」と述べている。

以上のように、ふり返りの概念を援用した支援者の力量形成の研究では、記録や報告などの取り組みを通して実証していくことが主流になっている。しかし、ここで一つの疑問が残る。すなわち、倉持のラウンドテーブルの場や、木全の学習記録づくりの場およびプロセスが、「ふり返り」を前提にした場になっていることである。これは高橋の「職員の力量形成を考えて、その方法的意義を論じるのではなく、『ふり返り』のために力量形成の問題がとりあげられ」⁵⁾ているという指摘とも重なる。すなわち、倉持のラウンドテーブルでは、「ふり返り」をするための言わば場であり、木全の学習記録づくりも、その取り組みそのものがふり返りの機能を含んでいる。言い換えるならば、活動の前提に「ふり返り」が設定されており、「ふり返り」ありきの議論になっているのである。

では、支援者の力量形成は、記録やふり返りを前提とした場でしか行われぬのか。つまり、ふり返りを目的としたフォーマルな学習の場のみで行われる、自覚的な力量形成だけなのだろうか。支援者は常に参加者との関わりを通して実践をつくり、気づき、次の実践につなげる作業を行う。そして支援者の働きかけは、専門的で客観的な知見のみに基づくものではなく、状況に応じた瞬時の主観的判断によって行われることも多く、時に実践をしながら状況を読み解き、柔軟に対応するケースも少なくない。確かに、先行研究で事例として取り上げられてきた、ラウンドテーブルや記録活動という、プログラムがあらかじめ用意され、活動について後に考察するという研修や講座的な定型化された教育の場においては、自覚的な力量形成が設定しやすく、また、学習支援者を学習

者として捉えることも可能であろう。しかし、子育て支援や高齢者福祉を目的とした集いの事業などのような非定型的な場においては、日常的な実践を通して無意識的に支援者のふり返りがなされていることが大いにありうることから、これまでの理論では把握しきれない力量形成のあり方が見られると考える。むしろ、このような場では記録や語りを通したふり返りを前提に据えて実践をする支援者のほうが少なく、多くの支援者が、日々利用者と向き合い、利用者の生活や変化を敏感にとらえ、それまでの利用者の姿や様子をふり返りながら、実践の中で臨機応変に支援を組み立てていく作業をおこなっている。

活動は、支援者個人の力のみで展開するものではない。活動は関連するさまざまな機関や人との連携の中で継続され、発展していく。支援者の力量とは、このような協同関係のなかで実践を行いながらリアルタイムに発揮され、身につけられていくものでもある。このような立場で見えていくと、ふり返りを前提に据えた自覚的な力量形成への着目に終始するのではなく、支援者自身が実践と同時進行で気づき、無意識的に自身をふり返るといふ、無自覚的な力量形成についても検討が必要であると考えられる。

2-3 子育て支援者の力量形成に関する研究課題

今日における子育て支援実践は実に多様化している。それに伴い、子育て支援者の概念もさまざまであるのが現状である。例えば、子育て支援政策のもと、国や自治体をあげて取り組まれている地域子育て支援センターや子育てひろば、児童館での支援では、保育士や幼稚園教諭、母子指導員の資格を有する者等がその従事者として定められており、それらの資格を持つ職員が専属の支援者として配置されている。一方、公民館などを中心に、母親等が自主的に取り組んでいる子育てグループやサークル、ネットワークなども、子育て支援の場や機会として大きな役割を担っている。しかし、そこには必ずしも有資格者が配置されているわけではなく、活動の企画や運営に関しては、支援者の善意とボランティアな意思によって形成されているところに特徴がある。「子育てで悩んでいた時、サークルの先輩ママに助けてもらった。その恩返しをする意味で、子どもから手がはなれた今、支援者として新米のママたちの力になりたい」。これは、筆者が2005年に育児サークルの代表をしている母親から聞いた語りである。このように、何らかの資格を有していなくても、支援者として活躍できる仕組みが、今日の子育て支援の支えの1つになっていることを忘れてはならない。

このような状況にある子育て支援者の概念について汐見 [2007: pp36]⁶⁾ は、「子育てに関わる子どもの親、子どもの家族だけでなく、子どもを取り巻くさまざまな資源や環境を含めて、それらと関わり子どもの育ちを保障するために支援する人」と定義し、「保育者も当然その概念に含まれる」としている。つまり、今日における子育て支援者とは、子育てに関わる子どもや親、そしてそれらを取り巻く地域社会をも含めた支援に携わる人材を、広く子育て支援者として捉える傾向にあると言える。

このように子育て支援や支援者の概念が限定されない中、福祉的、教育的な側面を備え持つ子育て支援の場であるだけに、これまでそこに携わる支援者の力量や専門性に関する調査・研究は数多

くなされている。中でも、子育て支援政策が保育政策との絡みの中ですすめられてきていることから、子育て支援担当保育士の専門性や役割については、様々な見解がみられる。

支援者の役割はファシリテーターやコーディネーターに近いとする研究〔柏女ほか2000：29-57〕⁷⁾や、カウンセリングの知識を必要とする研究〔民秋1998：111-117〕⁸⁾の他、専門性としてコーディネート力、コミュニケーション力、引き出す力を総合的に有するコミュニティワークが必要であるとする研究〔橋本ほか2002：1-9〕⁹⁾などが挙げられる。

これらの研究を力量形成の視点で検討していくと、支援者に必要な資質の整理や提示に重点がおかれてきており、それが期待される力量として目標値化されていることがわかる。しかし、その力量を如何に形成するのか、もしくはしていくのかについては議論されてきていない。さらに、広くここで示されている専門性や役割については、重要な視点且つ支援者の力量として身に付ける必要のある専門性であることは確かである。しかし、実際の支援の現場ではこれらの専門性がどのように体现されているのか、あるいは体现されていないのかについての検討はなされていない。すなわち、先行研究では、実践における課題への着目にとどまっているため、技術面や対応面での議論が中心になっており、期待される力量の目標値の整理に終始している。そのため、力量をどのように形成し、現場に還元していくのかについては議論されてきていないのである。また、子育て支援の指針等のレベルにおいても、現段階において子育て支援者の専門性やそれを力量として形成していくためのシステムづくりはなされておらず、支援者の経験や価値観、判断力などに頼らざるをえない現状にある。今日保育所では、親支援の立場から保育士の役割や専門性を力量として身に付けていくための方向性が保育所保育指針で示されるようになってきている。このように保育政策と大きく関連しながら進められている子育て支援ではあるが、子育て支援者の定義や力量形成については、未だ整備されていない。そのため、支援者の無意図的・無意識的なふり返りに大きく頼っているのも現状である。

2-4 子育て支援者の力量形成に対する本研究の意義

先述の通り、今日子育て支援者にはあらゆる子育て中の親とその子ども、さらにはそれらを取り巻く地域社会をも含めた支援が求められている。そこでは必然的に地域との連携が目指され、支援者の力量の一つとして求められると考える。この現状と先行研究での議論を踏まえ、子育て支援者の力量形成については、今後「力量を如何に形成していくのか」に視野を広げていく必要がある。その際、先で整理した学習支援者の力量形成の議論と関連付けながら検討できるのではないかと考える。

本稿は、学習支援者の無自覚的な力量形成に着目することで、これまでの議論の分析枠組みを捉えなおすことを目的としている。管見の限りにおいて、子育て支援実践の場には支援者の無自覚的な力量形成の場としての機能を十分にもっていると考え¹⁰⁾。子育て支援の場の多くは、プログラム化された講座や研修という定型的な学習の場を目的としていない¹¹⁾。よって、子育て支援実践の場を無自覚的な力量形成の場として位置づけ、子育て支援者の実践事例の検討を通して学習支援者

の力量形成について検討していくことは、子育て支援者の力量を如何に形成していくかという、子育て支援の分野における今日的課題へのアプローチとして期待できる。

3. 分析の視点とフィールドの概要

そこで本稿では、子育て支援の場において、支援者が日常の取り組みの中で無意識的・無意図的におこなっている気づきや反省、臨機応変な対応を「ふり返り」ととらえ、それらを通して身に付ける力量に着目する。支援に携わる支援者が、日常における実践やそこに足を運ぶ親子とのやりとりの中で気づき、身につけてきた価値観や専門家としての役割意識を如何に形成していくかについて検討していく。以下、子育て支援活動での日常的な場面における支援者と親子の関わりを事例に、前半では支援者による無意図的・無意識的なふり返りがどのようにおこなわれているかについて検討していく。また、子育て支援は支援者だけの力で行われているものではなく、支援者同士の連携や、さまざまな職種、立場にある人々との協同関係の中で取り組まれている。よって、後半では支援者のふり返りが、協同関係にある人々にどう影響しうるのかについて検討していく。

ここでは、福岡県N市にある地域子育て支援センター（以下、支援センター）での参与観察ならびに、子育て支援者を対象に半構造化インタビューで得たデータを基に分析を行う。インタビュー対象とする支援者は、同市の保育士として市立保育所に勤務していた60代のベテラン保育士Aである。Aは、同支援センター立ち上げと同時に、支援担当職員になり、現在まで子育て支援に携わっている。その中で、「子育て支援は地域支援」¹²⁾という認識に至り、地域で支えられる子育て支援の基盤を築いていっている。子育て支援者に保育士の力量としては中心をなさない、「あらゆる子育て中の親とその子どもへの対応」、さらには「地域との連携」が力量として求められると考えた場合、Aを事例として取り上げることにについて妥当性があると考ええる。なお、現在は定年退職を迎え、非常勤職員として同支援センターに勤務している。

4. 実践の中で営まれる力量形成

4-1 N市地域子育て支援センターの活動と特徴

地域子育て支援センター事業は、地域の子育て家庭を対象に、育児支援を行うことを目的として1993年度から実施された特別保育事業¹³⁾である。1994年、文部、厚生、労働、建設省4大臣による合意のもとで「今後の子育て支援のための施策の基本方向について」（エンゼルプラン）が、翌年には「当面の緊急保育等を推進するための基本的考え方」（緊急保育等5か年事業）がそれぞれ策定され、保育所における特別保育事業は積極的に推進された。地域子育て支援センター事業はその中に位置付き、子育て家庭等に対する育児不安についての指導や子育てサークル等への支援などを通して、地域の子育て家庭に対する育児支援を行う地域子育て支援事業の一環として開始された。その設置形態としては、保育所や保健所などの既存施設に設置されている併設型と、支援センター

が単独用途の独立した施設に設置されている独立型に大別される¹⁴⁾。

今回事例として取り上げる支援センターは、N市における子育て支援事業の中心施設であり、市健康福祉課別館内に設置されている。自立した本来の子育て支援を行うため、保育園併設型ではなく、独立型施設として開設された。保健師、病院、児童相談所、保育園や幼稚園、男女共同参画推進室、地区公民館等との連携のもと、2006年4月に開所され、管轄はN市である。分類としてはひろば型の支援施設ではあるが、時間を決めて年齢別の活動のほか、講座や相談事業がおこなわれている。

支援センターでの支援実施内容は、厚生労働省から出されたガイドラインに沿って各支援センターの裁量で行われている。また、支援センター設置の多くは保育園への併設という場合が多く、園行事との兼ね合い等により、実施内容のプログラム化や利用する親子のお客様化という問題が内在する¹⁵⁾。「子育て支援センターへの配属を言われた時、さあどうしようとなった。3箇所見学にも行った。でも、3つとも自分のイメージと違うと思った。どこも遊びに来てくださいというように、一連のプログラムがつくられていた」というように、A自身も支援センター立ち上げの際、既に事業として始動していた他の支援センターの視察を行っているが、その内容が形式立てられた内容であったことを指摘している。それは、Aが理念として持つ「人と人が繋がっていくこと」を支える支援内容とは乖離するものであり、同時に「自立に向かった支援をするために、自分たちで動いて企画運営していく集団をつくっていききたい」という思いを増幅させていった。

本稿では、筆者がこれまで調査を行ってきた9箇所の支援センターの中で、特に親子との対話や関わりを重視している点、そしてこのような親子に対する積極的な関わりにおいて、支援者の無意図的・無意識的な「ふり返し」が寄与しているのではないかと¹⁶⁾と思われる点に着目し、実践事例としてN市地域子育て支援センター（以下、支援センター）を取り上げた。以下は、筆者が行ったAへの聞き取り調査をもとにしたものである。

4-2 実践の中で行われるふり返し

・ I の事例

Iは重度のアレルギーの子どもをもつ母親である。支援センターを訪れるようになって間もなく、AはIに対して「何か悩みはありませんか？」と聞いた。その時Iから返ってきた言葉は「何もありません」であった。

月日が経ち、Iとのコミュニケーションや信頼関係が築かれる中、Iの育児日記に「今日子育て支援センターに行った。Aという人が何か変わったことはありませんか？悩んでいることはありませんか？と聞いてきたが、Aにアレルギーのことを言っても子どものアレルギーが良くなるわけではない。だから、『いいえ』と言った」という内容が書かれていることを知る。その時にAは、「どんな人かもまだよくわからない支援者に対し、悩みが深刻であればあるほど簡単には口に出せない」ということに気づいたという。そして、「その後です。私が彼女にアレルギーで困っているのよね？と聞いたのは」というように、信頼関係が形成されていない時期における事務的な「悩みはありま

せんか？」という問いかけに対する自らの行為や考え方を顧み、改めるようになっていった。

さらに、「とにかく記録さえしておけば何かが見えてくるし、何かが生まれてくるかもしれないから、だから記録¹⁷⁾しよう」とIに提案している。この提案は、Aのこれまでの経験の中から引き出されたものであったと同時に、母親の深刻な悩みや問題が、母親の手で記録されることで、いつか母親のためになると瞬時に察した結果、出てきたものであった。「センターには他にもアレルギーで悩んでいるお母さんが何人かいるんだけど、アレルギーのことなど自分の子どもの記録をとっている人は結構いるんですよ」というように、それまで出会ってきた多くの母親との会話や関わりを通した経験から、子どものアレルギーで悩む母親が少なくないこと、そしてその母親の多くがアレルギーに関する悩みや出来事などを記録しているということ、経験の中から思い出している。そして、記録をとるという行為が、母親の子育てをする際の糧になるのではないか。また、人と人が繋がることを重視するAにとって、記録がきっかけとなり、同じ悩みをもつ親同士が繋がれるのではないかと考えたのである。その後2006年の夏、アレルギーの子どもをもつ母親4人が顔を合わせ、「アレルギーの会」の発足が実現している。

このように、AはIとの会話の中で、子育てへの悩みや不安だけに目をむけ、「悩みはありませんか？」と聞くことが、「子育て支援の場では常套句になっている」ということを自覚することとなる。そして、Iとの会話を通して、悩みや不安は単独で存在するものではなく、家族関係や育児環境、子どもが抱えるさまざまな問題などが複雑に絡み合い、その中で認識されるものであることに改めて気づき、瞬時にその場においてそれを自覚化し、同時に自分の支援の在り方を見直していったのである。こうした無意図的、無意識的に今起きていることをキャッチし、その場でこれまでの支援経験をふり返り、自分の問題点を自覚することが、母親をつなぎ、支援をひろげていくAの実践力に寄与してきたと推察されるのである。

・Sの事例

Sは、出産予定日の2週間前まで歯科医師として仕事をするほど、仕事に対する責任感や熱意を強くもつ母親である。子どもが0歳の時から支援センターには足を運んでいる。

ある日、隣接する施設にSが子どもと二人でいるのを偶然見つけたAは、「何してるの？」と声をかけた。するとSは、「子どもと家にいても時間を持て余すから、託児付きの講座に参加していました」という。しかし子どもがあまりにも落ち着きがなくうるさいため、「託児はできません」と言われ、どうすることもできず、外に出てきたところだったと聞いた。その時Sは泣いていた。Aが「センターに来ればいいじゃない！」と言うと、Sからは「今日はこの子が行ける曜日じゃないから」という返事が返ってきた。その時に、「そんなつもりで年齢別の支援をしてるんじゃないのに。でも利用するお母さんには、そうは捉えられていなかった」ということに気付く。「特に乳幼児期は一歳違うだけで身体の大きさも、できること、できないことも全く違う」という子どもの発達の特徴に加え、「だからこそ、子どもの発達状況に沿った子育ての悩みがあったりする」というこれまでの経験による認識から、「年齢で分けた活動」を重視し、曜日毎に対象年齢を設定して

いた。しかし、Iが認識していたのは、Aが重視してきた年齢別支援の主旨というよりも、「この曜日でないと、自分は参加できない」というものであった。このような事実と直面し、母親たちへの活動内容の説明として、「対象年齢の子どもしか参加できないと捉えられるような説明方法になっていなかったか」、また「Sがセンターに来ない日のことや、どんな子育ての状況にあるのか気にとめていたか」など、A自身の対応についてふり返り、母親の本当のニーズを見落とししていたことに気付いた。そして、「そんな、対象年齢が違うからって、来たらいけないって言ったことないでしょ？センターにおいて！」と声をかけ、その足で支援センターに連れて行ったという。

その後、支援センターでSの子育てのことやS自身のこと、またこれまでのいろいろな話を聞いた。そこでSが「出産直前まで歯科医師をやっていた」こと、「勉強すれば良い成績をとり、周りからは『先生、先生』と呼ばれていた」が、「子育てのために仕事から離れてからはその辺のおばちゃんという扱い」になったことへの空虚感を抱いていることを知ったという。しかも「子どもはどんなに抱っこしてもどんなにあやしても泣き叫ぶ。いろんな子育ての知識や情報を得ても子どもは思い通りにはならない」ことで、子育てに対する行き詰まりを感じていることにも気付いた。「子どもはやんちゃで、今日はこうだった。明日はどうか？昨日はこれができた。今日はできるかな？というようなもの。思い通りにならなくて当たり前。しかし、そのお母さんは頭がいいから、自分が頑張れば思い通りの結果が出るという経験しかしていない。挫折をしたことがないから、子育てをどうして良いのか、子どもとどう向き合えば良いのか分からずにいた」とSを理解したAは、Sに大役を任せることを考える。「子育て以外のことで何かやりがいを感じてもらい、自信になったら、それが子育てにも良い影響になる」と思ったのである。

その後、年に一度の市をあげて開催される「子どもすすくフェスタ」の接客係に抜擢されたSは、「当日はピンッとスーツできめて来た。そして見事に接待をやりとげた」というように、市長や副市長を相手にその大役をなし遂げた。その時のSは「とても生き生きしていた」という。

この出来事を通して、保育士としての経験や知識が豊富であるがゆえに、子育て支援者として子どもの発達段階や、それに合わせた支援の必要性という客観的な視点をもとに年齢別の支援を設定していた取組みが、「母親の本当のニーズにこたえていたのか」というように、ふり返りがなされている。またそれが「本来意図する目的とは違う形で母親に受け止められていた」ということに気づく契機にもなっている。これは、それまでの保育経験や子育て支援経験により、A自身が確固としていたものが、伝わり方や配慮の仕方などで意図しない方向に発展するということを、母親との対話の中で気づき、自覚していくことでAの力量形成につながっていく事例であるといえよう。

以上、Aの語りの中から、子育て支援における母親との対話の中で出てくるさまざまな問題に対し、A自身がそれをどうとらえ、さらなる実践にどう反映させていくのかを示してきた。ここでAは、ノウハウをもってしてではなく、さらに意図的・意識的に母親への働きかけや支援のあり方をふり返るのでもなく、実践の中で偶発的におこる様々な問題に対し、瞬時に自分の支援をふり返り、問い直しながら、支援の力を身につけていると読み取ることができる。

4-3 ふり返りの展開

以上のケースを図式化すると図1になる。例えばIの事例からは、IからI'への変容は明らかである。しかしこの変容は、I自身の力のみで可能となったものではない。この変容は、Aによる何らかの「働きかけ」があったからこそ可能となったものである。むしろここでは、子育て支援者としての専門的な「働きかけ」がなされていたと考えられる。しかし、IからI'への変容は、一方的なAからの「働きかけ」のみで可能となるものではない。ここにはIからAへの「反応」というベクトルが存在し、この関係において変容が可能となったのである。

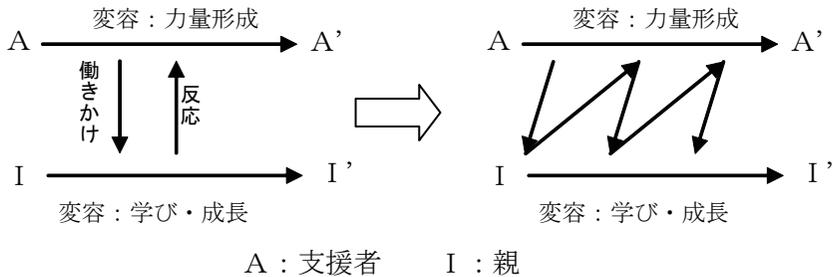
つまり、まずAがIに対して「何か悩みはありませんか？」と、声かけという「働きかけ」を行っている。その後、Iからの「Aに子どものアレルギーの話をして、アレルギーが良くなるわけではない。だから悩みは無いと言った」というAに向けて「反応」をする。この反応がAに向けられ、「よく知らない支援者に対して、深刻な悩みほど簡単に口に出せない」という気づきを導いている。その気づきは、それまで行っていた「悩みはありませんか？」という事務的な働きかけを反省するものでもあった。その後、「とにかく記録をしよう」とAからIへの働きかけがなされ、後にIはアレルギーの会の結成へと進み、今では同じ悩みをもつ親との交流を積極的にもつまでに至っている。

IからI'への変容の契機はAの「働きかけ」であった。しかしこの「働きかけ」は単に一方的なものではなく、Sからの「反応」があったからこそAの気づきや反省が可能となった。そしてこの一連の動きは、「AからIへの働きかけ」→Iの反応→「IからAへの反応」→Aのふり返り・反省→「AからIへの働きかけ」というように続いていく。そして、このI→I'の変容、つまり成長は、AがA'に変容してこそ可能となる変化である。すなわち、Aの「働きかけ」に対するIの「反応」があり、Aのふり返りによってAがA'へと進んでいく。この一連の動きがない限り、IからI'へのベクトルは続いていかないのである。このように、SがS'へと成長していくうえで、AがA'へと変容するという変化が不可避なのである。そしてAからA'への変容を可能としたのは、ふり返りという作用が含みこまれていたからであると考えられる。

以上、実践の中でおこなわれる支援者の無意図的・無意識的なふり返りによる力量形成の営みについて考察してきたが、これはAとIの関係のみでみられる現象ではない。Aの言葉かけの内容や母親の反応はその場、その時によって、さらには相手とする母親によってさまざまであるが、「働きかけ」や「反応」というベクトルの双方向的な動きはあらゆるケースにおいて見られるものである。そしてそのやり取りの過程において、Aのふり返りが可能となり、力量形成へと繋がっているのである。

しかし、AからA'への変容を可能とするのは、対象とする母親との関係のみではない。そこには、これらを取り巻く環境が必要なのである。それは、子育て支援の場にいる他のスタッフや、その他の親子の存在も大きいであろう。また、広い視野をもっていえば、これらを取り巻く地域社会が大きな存在となっていることを指摘しておきたい。

図1 ふり返りによる変容のイメージ



5. 地域で支えられる子育て支援への発展

5-1 母親同士の繋がりづくり

このような、Aの日々何気なく行っている実践の中でのふり返りは、母親と母親を繋いでいく架け橋になっている。例えば先述したIとのやりとりが契機となり、アレルギーの子どもをもつ母親がいたら、「同じ悩みをもつ母親が他にもいる」ことを伝え、少しずつ仲間が増えていく仕掛けをつくっている。そこでは、アレルギーに苦しむ子どもの話や、アレルギーに関する悩みや相談、情報交換などが母親同士でなされている。「他の子がお弁当を注文する中、アレルギーの子どもをもつお母さんは、本当に感心するくらいお弁当をちゃんと作って持ってくる。出来合いのものを買って食べることが許されないから、毎日毎食除去食を作らないといけないのよ」というように、Aの目から見ても、Iたちは子どものアレルギーと向き合おうと一生懸命だったと述べる。そして、「でもね、この子がいるおかげで家族みんなが健康的な食事をとることができているんです」という意識が母親に芽生えたと感じた時、「アレルギーを通して、子どもがこんなことを教えてくれているんだという原点に立ってからだったら、サークルを立ち上げてもいいんじゃない？」と、母親たちにサークルの立ち上げをもちかけたのである。

このようにして「アレルギーの会」は2006年の夏に発足した。活動は月に2回、市内の公民館などの施設を借りて活動をしている。そして、医者でもない、看護師でもない、アレルギーの子どもをもつ母親としての立場から、アレルギーの子どもとその保護者に向けた『すくすくぶっく』の発行や、勉強会、講演会を企画、実行するなど、積極的な取り組みが、母親の手でなされている。Iたちのこれまでの活動を思い出しながら、「サークルができてしまえば、支援センターに来なくても、サークル内でお友達を誘ったりしてひろがっていける」とAは言う。「アレルギーの会」にとどまらず、N市には支援センターに訪れる母親が発起人となって立ち上がった育児サークルがいくつもあつた。そこには、Aの「人と人が繋がっていける子育て支援」という強い理念があつたのである。

5-2 地域を意識した支援へ

Aは、自身の保育経験から、「保育所には先生がいて、『今からこれをやります』、『これをこうし

てください』など、ある意味その場を仕切ることが求められることが多々ある。しかし、子育て支援担当になるとわかった時、そういう親とのかかわり方ではいけないと思った」と述べる。支援センター立ち上げの際、実際に行われている他の支援センター事業や、そこでの支援者と親子の様子や関わり方など、一つひとつを丁寧にみていくうちに、「イベント的なサービスの提供が果たして子育て支援なのか」という問題に直面していった。

このように、子育て支援事業として今何が求められているのか、親子の真のニーズはどこにあるのかを考えたとき、「支援者だけの力では太刀打ちできない」ことに気付いたという。そして、その力を地域にいる人や組織に求めることを、A自身が目指す子育て支援像として自覚したのである。「早い段階で、ネットワーク化したかった」という語りからもわかるように、支援センターとかわりをもつさまざまな人たちに向けた働きかけが始まるきっかけになった瞬間でもあったといえよう。

そして、「なかなか認めてもらえない」という公民館での子育て支援の主催事業についても、一館一館に足を運び、お願いし、ようやく一館だけ主催事業として実施してくれる公民館が見つかった時は、「本当に嬉しかった」という。「文化や育児の伝承など、地域で培ってきたものというのは宝だと思っている。若いお母さんたちで集まるサークルも自主的で良いと思う。でも、私は地域と交わることで繋がると思う。そのためには、公民館の主催事業でないといけない」と、その思いを語ってくれた。

さらに、子育て支援センターは市の主催事業でもあることから、行政との連携はもちろんのこと、さまざまな相談や子育て事情に対応できるよう、民生委員や保健師との連絡、連携体制が敷かれている。しかし、それだけではなく、Aの頭には常に公民館や学童保育、民間団体や企業を含め、子育て支援実践は職種や立場の異なる人々の手によって、協同して作りだされるものという意識がある。そしてそれらが協同関係として手を取り合い、形になったのが「子どもすくすくフェスタ（以下、フェスタ）」の開催であった。

フェスタは「出会い、喜び、育ち合い」をテーマに、2006年から開催されている、子ども文化事業である。例年100名を超えるボランティアスタッフで作り上げられている、市をあげての大きなイベントの一つであるが、そのボランティアには、市内にある子育てサークルや学童クラブ連絡協議会、NPO、老人クラブのほか、保育園や図書館、美術館、警察署、消防署など、多くの人々の手によって支えられているところに特徴がある。そして、その土台をつくり、ネットワークを形にしていっていった中心人物がAであった。子育て支援センターはそのフェスタの実行委員の中枢部となり、支援センターに訪れる母親たちは、毎年実行委員として力を発揮している。特に、「実行委員をやることにに対する抵抗は、特にありませんでした。自分たちでやるというより、センターの先生たち（支援者のこと）がやることを、私たちも一緒になってやるという感じなので。先生たちもやるから、私たちもやろう！みたいな感じです」と、支援センターに来ていた母親が言うように、Aはただ人と人を繋げるだけでなく、自らも一緒になって繋がっていくことを示し、その姿を多くの人々に見てもらおうことで伝えているのである。

フェスタの実行委員会は、支援センターの2階にある多目的スペースで行われる。そのことで、普段支援センターには訪れない高齢者や公民館職員のほか、多くの関係者が親子と共にフェスタを作り上げていく。実行委員会では高齢者が子どもと触れ合う姿も見られ、話し合いを重ねる毎に「顔見知り」になり、交わされる会話にも変化が見られるようになったという。現にフェスタ当日は、廃校になった高等学校の体育館とグラウンドを使い、地域の婦人会や老人クラブの方々による軽食や弁当の販売、おもちゃの工作、作品展示、活動披露などが行われ、多数の学童クラブがバザーや作品販売を行っていた。また、近隣の高等学校の生徒や地域の保育園のみならず、企業や警察署、消防署、役所までもが様々なブースを担当し、子育て中の親と地域住民、行政が一つになって取り組まれていた。参加する母親は、「フェスタに参加することで、日常的に地域の方々とのかかわりが深くなったという実感はあまりない」という感想を抱きつつも、50を超える団体やサークル、企業が一同に集い、同じ目標や目的に向けて企画し、会議を重ね、イベントの実施に携わることで、着実に地域住民のネットワークは形になり始めている。

このような人と人が繋がり、地域に拓かれた子育て支援やさまざまな立場にある地域住民との協同関係の構築は、Aだけの力によるものではない。そこには協力してくれる多くの人々の存在や環境があった。支援者の力量形成を検討するとき、多くがその支援者個人に目を向けがちである。しかし、支援者はさまざまな立場や職種にある人々と連携しながら支援に携わっている。そして、支援者の力量形成は、このような関係性の中で組織的になされているのである。

6. まとめ

本稿では、実践の中で行われる、無意図的・無意識的なふり返りによって可能とされる支援者の力量形成を、支援者と母親の語りから質的に検討した。

本稿の成果としては、まず、支援者の力量形成が営まれる場について、新たな視点を示した点である。これまでの学習支援者の力量形成に関する議論では、記録活動や話し合い学習などを通したふり返りが意図的に設けられていた。しかし、支援者は必ずしも意識的なふり返りのみで力量を形成しているわけではないこと、そしてこのような場面が、福祉的な側面を持つ場においては大いにありうることから、支援者の力量形成を営む場として非定型的な場における無自覚的な力量形成な場を新たに示した。そして事例分析では、支援者の力量形成および、参加者（事例では母親）の学びや成長という両者の変容には、支援者と参加者間で「働きかけ」と「反応」が連続的に行われ、そのプロセスにおける支援者のふり返りが、力量形成の基盤になっていることを明らかにしていった。また、このような一連の流れから、さらに支援者のふり返りは進められ、子育て支援の場のみでの支援にとどまるのではなく、地域で支ええられる子育て支援へと発展させるべく、地域住民をはじめ、さまざまな機関や団体との連携へと活動範囲を広げている事例から、支援者の力量形成が、地域住民の協同関係構築への一途を担っているという社会的な意義を持つことを示した。このことは、これまでの支援者の力量形成をめぐる議論において、ふり返りや省察の必要性を述べるにとど

まっていた現状から、さらに視野を広げた見方をする視点を示せたという意味で、2つ目の成果として位置づけたい。

しかし、残された課題も少なくない。ここではそのうちの2点を指摘しておく。1点目は扱う事例についてである。今回は筆者のこれまでの調査やボランティア経験から、支援者Aの事例を対象に選び、考察を行った。しかし、ここで明らかになったことが他の支援者にも見られることを示すためにも、今後他の支援者で実証していく必要がある。

2点目は、支援者相互の関わりへの着目である。同じ実践に携わる支援者同士の関わり合いにおいても、無意図的・無意識的なふり返りによる力量形成が営まれていることが推測される。これらの点についても、今後一層考察を深めていく必要がある。

<注>

- (1) ドナルド・ショーン 2001『専門家の知恵』ゆみる出版。
- (2) 三輪健二 1999「成人期の学習と教育」『看護管理』第9巻第12号、医学書院。
- (3) 倉持伸江 2004「ふり返りに注目した学習支援者の力量形成」日本社会教育学会編『成人の学習』日本の社会教育第48集、160-172頁。
- (4) 木全力夫・齊藤真哉・的野信一 2004「社会教育職員の力量形成と学習記録」日本社会教育学会編『成人の学習』日本の社会教育第48集、147-159頁。
- (5) 高橋満 2009「公民館実践分析の視点」『月刊社会教育』NO.642、国土社、75-80頁。
- (6) 汐見和恵 2007「保育者の役割と保育者に求められる専門性—今求められている子育て・子育て支援のコンピテンシー—」『東京文化短期大学こども教育研究所紀要』第2巻、31-42頁。
- (7) 柏女靈峰、山本真美、尾木まり、谷口和加子、林茂男、網野武博、新保幸男、中谷茂一 2000「保育所実施型地域子育て支援センターの運営及び相談活動分析」『日本子ども家庭総合研究所紀要』第36集、29-57頁。
- (8) 民秋言 1998「地域子育て支援センターの実証的研究」『研究助成論文集』第34号、111-117頁。
- (9) 橋本真紀、日浦直美 2002「地域子育て支援センター職員の専門性に関する考察Ⅰ」『聖和大学論集 A教育学系』第30巻、1-9頁。
- (10) 筆者はこれまで、子育てサークルや子育て支援センター、子育て広場などを対象に観察記録やインタビュー調査、ボランティアなどを行ってきた。
- (11) なお、子育て支援には、子育て中の親を対象とした講座など、指導者と学習者によって構成されるような、家庭教育支援の意味合いが強いものもある。しかし、福祉的側面の強い子育て支援実践においては、指導者と学習者という分け方はせず、親子の自由な参加が基本とされる。
- (12) 2009年10月29日に行った、Aへのインタビューより。

- (13) 社会で活躍する女性の増加や就労形態の多様化、子育て不安や子育て鬱に代表される育児に関する心理的負担の訴え等に伴い、低年齢時（乳児）保育や延長保育など、いわゆる特別保育は各地の保育所で以前より少しずつ行われていた。平成元年には政府により保育所を中心とした育児相談・指導、育児講座を実施内容とする保育所地域活動事業が実施されている。
- (14) 2007年度より子育て支援事業に関しては、「地域子育て支援拠点事業」と名称が変わり、地域子育て支援センター事業は単独の事業としては廃止されている。しかし、機能を残す形で地域子育て支援拠点事業の中に位置付けており、事業は事実上継続されている。また、地域子育て支援拠点事業では、子育て支援の形態を、「ひろば型」「センター型」「児童館型」に分類し、子育て支援センターについては、今後活動内容に応じて「ひろば型」もしくは「センター型」に分類されていく。
- (15) 詳細は、大村綾 2007「地域子育て支援センターの保育士の専門性に関する事例研究」『九州教育学会研究紀要』第35巻、189-196頁を参照していただきたい。
- (16) 過去9箇所で行ってきた調査を通じて感じた筆者自身の推察による。
- (17) ここでの記録とは、我が子のアレルギーの症状などを記すもの。アレルギーの症状や処方された薬、収集した情報などを母親がまとめるものを指す。

Ability Formation of those who Support Bringing up a child

Aya OMURA

The purpose of the present study is to reexamine, through a look at childcare support workers practice cases, analytical frameworks regarding ability formation of those who support study.

Much research has been performed so far using the theory of “Reflection” to discuss the role of practice in the ability formation of those who support study. “Reflection” as used in previous research regarding those who support study has treated formal educational as its area of analysis. Namely, there has been a tendency in research on ability formation of those who support study to employ the theory of “Reflection” to fixed-form course and training session situations.

However, ability formation of those who support study occurs not only in formal learning settings alone. It is thought that the process of acquiring new knowledge and skills via the process of awareness, learning, and growing while supporting the learner amidst a relationship of praxis, also leads to the ability formation of those who support study. Therefore, it is necessary to examine ability formation by examining not only approaches in formal settings in which courses and training have been set, and programs developed intentionally, for those who support study, but also to widen one’s view to include nonformal settings in which ability formation occurs as a natural result of daily practice.

Based on this premise, this study seeks to clarify ability formation of those who support study in nonformal settings by focusing on workers involved in childcare support. My examination centers on interviews with such supporters to consider how their ability forms through daily interactions with parents and children. In interviewing, I invoked a “praxis daily life based” method of collaborative learning to clarify the study supporter’s ability formation in nonformal settings.